

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選

その24

文：長谷沼 せいきち 清吉さん

柴崎の殉難碑

柴崎から橋立に向かうと、旧県道の崖の所に2つの殉難碑がある。

1つは、大正12年11月14日建立の碑である。事故はその前年の11月14日の出来事であった。武藤善伍^{ぜんご}は、柴崎集落が経営する柴崎渡船場に勤務中、学区外の群岡小学校に通う児童や旅人を乗せ渡し舟をこぎ出すも、激流のために転覆してしまう。善伍はすぐに一人の児童を助け、次の児童を背負い助けようとするも、かなわず殉死してしまった。このとき28歳、4歳の男児の父親であった。殉難碑の拓本には、わが身を顧みぬこの行いに「人々は泣き感奮す」とあり、県と郡はこの善行に褒状と賞品を以て追賞している。これを受け、新郷の青年団・消防団の尽力もあり、翌年の殉難碑建立となったのである。

もう1つは、昭和12年1月5日建立の碑である。明治36年に喜多方・柴崎間が一等郡道里道として完成。大正14年に県道に格上げとなり、改良工事が始まった。柴崎橋架橋のための道路工事のとき、急勾配の崖での工事であったため、大きな岩石が突然くずれ3人が犠牲となった。殉難者は柴崎の石川好三^{よしみ}と工事人夫の齋藤友平と滝沢某^{なにかし}である。某とは名前が不明だからであろう。資料からは工事飯場の一端が伺える。柴崎橋の完成を祝し、昭和13年7月31日県知事君島清吉を迎え渡橋式を挙行している。

なお、柴崎高橋家文書には、「明治17年薪運搬船転覆10名救助」とある。また、「昭和3年10月15日阿賀川筋で測量船が転覆3名死亡」と別な資料にある。



↑ 2つの殉難碑（左が武藤善伍の碑）



↑ 武藤善伍殉難碑の拓本



今月の表紙

今月の表紙は、昨年4月19日に上野尻発電所周辺で撮影した桜の風景です。今冬は雪が少なかったため、桜が見頃を迎えるのも早いかもしれませんがね。ちなみにこの場所、タイミングさえ合えばSLも一緒に写すことができます！

編集後記

日ごとに暖かくなり、季節はすっかり春の様相です。春といえば、ちようど1年ほど前。「何だか目がかゆいな」と思いながら過ごしていたら、ある日突然、鼻のむずむずとくしゃみが止まらなくなりました。これが噂に聞く花粉症か！と思いきや耳鼻科に行ったら、「今年は花粉が多いみたいだからね」と先生。母が花粉症なので、「ついに自分も花粉症か」と考えを巡らせましたが、薬を飲み始めると数回の服用でスッキリ回復。あれ？花粉症？果たして今年は… 長谷川祐一